

# 宗像沖ノ島紀行

土屋 久

古来、大陸や朝鮮半島とを結ぶ中継地で、古代には重要な国家祭祀場となり、出土した数多の国宝級文化財から「海の正倉院」として知られる玄界灘の沖ノ島。五月に催された宗像大社沖津宮現地大祭をとおして、海の持つ霊性や島の地政学的重要性、心身を賦活する聖地としての意味を考える。

聖地巡りをするようになったのは、いつの頃からだろうか。それほどたくさん場所を訪れたわけではないが、気に入った所があると何度もそこへ足を運ぶので、回数だけはかなりになると思う。ところで、筆者は聖地と呼ばれる所に行くと、何となく元気になることが多く、自然とそこへ行くことを体が求めるのである。

もちろん、聖地にまつわる歴史的な、文化財としての側面に興味がない訳ではないが、ある種の「心地よさ」を求めて、聖地を巡る場合が多い。近年、不思議なことに、筆者にとっての賦活の場は島であることが多く、暇を見つければ

では島通いをしている次第である。

そうした中、今回、筆者は毎年五月二七日に沖ノ島（福岡県宗像市）でおこなわれる、宗像大社沖津宮現地大祭に参加する幸運に恵まれた。この貴重な体験を通じて、思ったこと、感じたことを紀行文風に記しておきたい。

## 雲霧の島へ

沖ノ島は「神の島」ゆえ、基本的に人の立ち入りは禁じられ、一〇日ごとに交替する神官一人によって守られてい

る。だが、唯一、五月二七日におこなわれる大祭だけは、一般人の立ち入りが許可される。祭に先立ち、宗像大社に参加申し込みをし、申込者の中から二〇〇名程度の人たちが沖ノ島へ渡島出来る。筆者は、日本島嶼学会の会員八名とともに、この枠に運良く入ることが出来た。大祭に参加する者は、前日までに大島に渡り、そこに鎮座する中津宮なかつみやでの宵宮祭よみやさいに参列する決まりとなっている。

筆者は、宗像大社へつみや辺津宮参拝後、一日早い大祭前々日の夕刻、神湊こうのみとからフェリーに乗り大島に入った。その日泊まった宿の女将は現役の海女で、六〇歳を越えた今も娘とともに海に潜っているとのことであった。「昔は、沖ノ島の方まで漁に出かけたこともある」と話していた。日本の海女のルーツともいえるこの地で、本物の海女に出会えたことに感動しながら、おしゃべり好きの女将の話に耳を傾けた。翌日、やはり前々日に大島入りしていた日本島嶼学会の理事



沖ノ島に上陸するには、海中で褌を済ませねばならない。

と車を借りて、大島を一周し、砲台跡や島の最高峰に祀られる御嶽神社みたけ、沖ノ島遥拝所ようはいじよなどを見て回った。沖ノ島はよく知られている通り、現在でも女人禁制が厳しく守られている。そのため、女性おんなは、ここ大島にある遥拝所から沖ノ島を拝むこととなるのである。この日は、残念なことに海上が霞んでいて沖ノ島の島影を見ることは叶わなかった

が、海原の彼方に、確かに沖ノ島があると感じられる場であった。さて、そうこうしている内に、夕刻となり、三々五々集まって来た学会員とともに、宵宮祭に参加し、翌日の大祭の無事を祈ったのであった。

翌朝、六時三〇分に大祭参加者は港に集合し、七時には漁船その他に分乗して出発した。筆者らは、普段は神港と大島の間を結ぶ旅客船「しおかぜ」に乗り込んだ。

強めの冷房の船内で震えること約二時間、突如海上に、霧を纏まとった沖ノ島が現れた。海に聳そびえ立つ巨大な岩の塊を向こうに、

一キロ程手前には、沖ノ島への門とも言うべき小屋島、天狗岩、御門柱の三岩が見える。船は、その岩の間をすり抜けて行く。言わずと知れたことだが、この沖ノ島には、宗像大社沖津宮が置かれ、田心姫神が祀られている。この女神は、市杵島姫神、湍津姫神とともに宗像三女神と呼ばれ、タゴリはタゴリの意味で、玄界灘にたつ霧の神格化されたものであるとされる。

その古人の豊穰な想像力に思いを巡らせているうちに、船が島に到着した。船着き場は、どうしたことかスッキリ晴れており、すでに到着した組が、もう海中で禊をおこなっていた。ある先達から、沖ノ島の不思議として、道中天候が不順であつても、島の辺りだけがポツカリ晴れていることがある、と聞いていたが、何となく納得するとともに、女神が懐に入った者を優しく迎えてくれていて、何とも言えない安心感があつた。船を降り、われわれも早速全裸になり、海中で禊をおこなつた。海の水は、思いのほか冷たかつたが、禊をおこなわない者は、何人たりとも沖ノ島へは入れないのである。

## 沖ノ島の地政学

ところで、筆者達が参加した宗像大社沖津宮現地大祭は、日露戦争の命運を決した日本海海戦での勝利を記念しておこなわれるようになった祭祀である。日本海海戦は、明治三八（一九〇五）年五月二七日に、沖ノ島付近の海上においておこなわれ、この戦いで日本は歴史的な大勝利を収めた。大祭は、この勝利を沖ノ島に鎮座する神の神徳であるとして、神に感謝し、今後の日本の平和と安全を祈願するものだと説明される（『むなかたさま その歴史と現在』）。

つちや ひさし  
土屋 久



神奈川県出身。共立女子大学非常勤講師。青ヶ島、八丈島、沖繩などをフィールドにシャマニズム研究に従事。島嶼の精神世界に惹かれ、ここ20年ほど島通いを続けている。写真は、沖ノ島山頂で撮影したもの。すぐ後ろは断崖となっている。

当時、島に滞在した神官に仕えていた佐藤市五郎という人物が、樹上より望見した連合艦隊とバルチック艦隊との戦闘の様子を、沖津宮創建以来書き継がれている「沖津宮日誌」に記している。「廿七日 西風強曇天霧霞」から始まる文章は、簡潔ながら、当日の張りつめた状況をよく表現しており、この戦闘が、日本にとってどれほど重要であつたのかが理解出来る。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』などを讀むと、ロシアとの海戦に際し、

ヨーロッパ方面から地球を半周して、ウラジオストクの港へと北進するロシアのバルチック艦隊が、近道である対馬海峡を通るか、それとも太平洋を回るルートを選択するか、当時の海軍首脳の頭を大いに悩ませていたことがよく解る。この一事をもつても沖ノ島一帯の海域が、大陸との関係を考える上で重要な地域であることが察せられる。視点を古代に移してみると、朝鮮半島との間に、緊密な関係を築いていたヤマト政権にとつて、瀬戸内海を経て朝鮮半島へと向う中間地点として沖ノ島は重要な役目を果たした。『日本書紀』の一書に「今、海の北の道の中に存す。号けて道主貴と曰す」とあり、航海、道中の安全を守護する神として、この沖ノ島が古くから尊崇されていたことが分かる。

ここで、いささか唐突だが、本誌前号の「余滴」に、南を上、北を下にした方位逆転の日本地図のことが記されていたことを思い出して欲しい。その地図を見ながら、編集子は、「東北アジアにおけるわが国の地政学的位相が炙り出されて来、驚きを禁じ得なかつた」と述べ、「能登を含む北陸、東北、山陰など、『裏日本』という一方的な称号を冠せられた地域沿岸をはじめ、北海道、北部九州、南西諸島こそがじつは対隣諸国との近接点であり、東京などとは大陸からもっとも遠い僻陬の地のようにも思えてくる」と書いている。編集子のこの感覚は、九州北部に位置する沖ノ島に

刻印された歴史を顧みた時、また、実際この島に赴き、そこに立った時、筆者にも充分納得のいくものであった。

また「余滴」は、「海は国土に準じる括弧つきの『国土』であり、国土管理という意味から沿岸地域と島は国の骨格部分を占めるようにならないといけない」という当該号に掲載された対談の一節を引いているが、島嶼国家日本にとり、海洋やそこに浮かぶ島が、どれほど重要な存在であるかということ、沖ノ島という存在は、われわれに示しているように思う。

### 「不言様」の地に

さて、海岸で禊を終えた筆者らは、すぐに鳥居を潜って山道を登り始めた。ここからが本当の禁足地である。そう思うと、自然に身が引き締まる思いがする。沖ノ島の禁忌は大変に厳重で、異国船警戒のため、江戸時代後期に、この島に派遣された福岡藩の国学者、青柳種信は『瀛津島防人日記』という書物の中で、次のように記している。

此嶋の大神いたく汚穢を忌給ふによりて、山中にてかりにも唾き小便る事なし。若しあやまちえけかす時は、其地の土をすくひ海にもて出て磯に捨て、清き砂をさきの土とりしあとに埋みて、本の如くならしおく。これ

を犯してしかせざれば忽<sup>こゝろみだ</sup>狂乱<sup>まは</sup>んとする。

そういえば、今回も、山中に入るにあたり、「トイレはない」という注意を受けたように記憶する。その他にも、青柳は「神山の内では神様に行き合わないために、常に声

をとどろかしてゆく」という言い伝えがあることについて書き記しているが、まさに鳥居の内は、神気を身近に感じる空間であった。よく知られるように、かつては、この地で見たり聞いたりしたことを他言するのは禁じられ、そのために沖ノ島は「不言様」といわれていた。こうした禁忌



沖津宮の鳥居を潜って神域に入る。

鬱蒼とした森の中に  
鎮まる巨石。



現地大祭が執り行われた沖津宮の社殿。



の厳しさは、無論、今でも残っており、山中を歩く人びとの顔にも、心なしか緊張の面持ちが見られた。

山道は、数日前に道普請みちぶしんがおこなわれたらしく、綺麗で歩きやすい。二〇分程歩いたかどうか、鬱蒼とした森の中にポカッとした空間が現れ、巨岩が視界に飛び込んで来た。岩の大きさは、筆者の想像以上で、その大きさを感覚的に把握するまで少し時間がかかった。その巨大な岩の陰に、社が建てられており、それが宗像大社沖津宮であった。沖津宮付近の空き地には、すでにたくさんの方が集まっており、大祭の開始を待っていた。余り広くない空間に大勢の人がひしめき合い、自身の場所を確保するのが大変であった。周りを見回してみると、山歩きのできる格好の方が大半であったが、修験道の衣装を纏った方や、白装束の方、僧衣の方なども見える。



山頂から望む沖ノ島の港。

しばらくして、大祭が始まった。神主のりが祝詞を上げ、儀式が進んでいく。最後に、玉串たまぐしの奉奠たんとなり、参拝者を代表して玉串を捧げる方々の名前が呼ばれていく。それを聞いてみると、地元の漁業関係者や学術関係者、神社関係者、神霊研究団体、新（新新）宗教関係者等、改めて多種多様な方々がこの大祭に参加していることがわかった。多分、それぞれがそれぞれの「思い」を抱いて、この沖ノ島に参集いっくえしているのだろう。その何重にも重なった多くの「思い」を、総て包含しているところに、沖ノ島の聖地としての包容力を感じずにはいられない。

祭典が終わると、自由時間となった。出発まで、二時間程しかなかったが、思い切った頂上の灯台まで登ることとした。原生林が生い茂る山道を、急ぎ足で三〇分程登ると、頂上に出た。筆者は、元来、高い所が苦手であるのだが、勇気を出して、修験道の行者よ



ろしく下を覗き込むと、港が霧に見え隠れしていた。佐藤市五郎もこの場所から、日本海海戦を望見したのでろうか。下山途中に、巨石群の間を歩いてみたのだが、体に心地よい振動が響き、なかなかその場を離れることが出来なかった。沖ノ島の祭祀は古来、この巨石群を中心におこなわれていたらしいが、さもありなん。去り難い気持ちを抑えて、時間に追われるままに、港に降りた。

午後一時頃、沖ノ島を出発する時間となった。「神の島」である沖ノ島からは、一木一草たりとも持ち出すことは禁じられている。ただし、唯一の例外があつて、島に湧き出す「ご神水」だけは、神職によるお祓いを受けた後、持ち出しが許されている。筆者は、数本のペットボトルに水を詰めて持ち帰った。ほんのりと潮の香りがして、決して「美味しい水」とはいえないが、何かしら「力のある水」という感じがした。先に挙げた青柳種信も、「ご神水」の効用として、「もろもろの病をいやす」（瀛津島防人日記）ことを記しているが、後日、そのペットボトルを、筆者の友人、知人に配ったところ、さまざまな効用が報告され、筆者自身が驚くということがあつた。

### 鐘崎から地島へ

午後四時頃、神湊にもどつた。飛行機の時間にはまだ余

裕があつたので、日本島嶼学会の会員数名と鐘崎にまわつてみることにした。鐘崎は、海女の発祥の地とされる場所である。この海女は、能登や長門、壱岐、対馬などにも出かけて行き、各地に分村ができたそうである。鐘崎の岬には『延喜式』にも記載される織機神社が、ひっそりと鎮座していた。ここに参拝した後、沖合に浮かぶ人口二〇〇人余りの島、地島へ渡つた。渡船の名前は「ニューじのしま」で、地島の泊港との間を一二分、さらに白浜港までを八分で結んでいる。筆者らは、船の時間を気にしながら、両港に降りてみることにした。島の中をそれこそ駆け足で見回り、息を切らしながら船に乗つたのだつた。

帰りに、船のデッキから、泊港で見送りをする小学生の一団を見かけた。地島では、平成一五年より、島の活性化と小学校維持のために、福岡県内の小学生を一年間「漁村留学」として受け入れる制度をおこなっている。どうやら、その生徒達が島外から船で通勤する先生二人を見送っているらしい。波止場で、ライフジャケットを付けた五、六人の生徒達が、こちらの姿が見えなくなるまで手を振っていた。女性の先生が、「毎日見送ってくれるんですよ。可愛くてしょうがない」とおっしゃっていたのが印象的だった。思いがけず素敵な光景に出会えたのは、沖ノ島参拝の御陰であろうか。渡船「ニューじのしま」は、港に向かう漁船群の横波に大きく揺れながら、鐘崎に向かって進んでいった。

## おわりに

「海の靈性」に着目する菅田正昭に次のような一文がある。

おのれの出自を「海辺の旃陀羅が子」と規定した日蓮と、その日蓮が流された佐渡をおそらく遠望しながら少女達と手毬をついていた良寛。この二人に典型的にみえてくるのは《海の靈性》である。鈴木大拙の《日本的靈性》にはその《海の靈性》の視点が欠落しているのである。というよりも、日本的靈性の原基は《大地性》よりも《海洋性》に、求めるべきなのだ

〔アマとオウ―弧状列島をつらぬく日本的靈性〕。

ここで、菅田の展開する鈴木大拙批判、日蓮や良寛に対する評価が妥当なものかどうか、筆者には判断できないが、彼が指摘する《海の靈性》という視点には大いに刺激を受ける。われわれの精神が形成されるにあたり、海が存在はとも大きな部分を占めていると筆者は考えるからである。今回、沖ノ島に渡るといふ僥倖を得て、そこが地政学的に重要な場であるとともに、《海の靈性》という問題を考え、深めていく上でわれわれに豊かなものを与えてくれる場であると感じた次第である。沖ノ島は、まさに聖地であり、筆者の心身を賦活させてくれる場であった。

大祭参加者の多くが、翌年も大祭への参加を希望するようである。筆者も同様の思いである。

### おきのしま 沖ノ島 data

宗像大島の北方約48kmに位置する。面積0.69km<sup>2</sup>、周囲約4km。記紀神話によると、天孫降臨に先立ち天照大神は「汝三神よろしく道の中に降り居て天孫を助け奉れ」と神詞を発し、宗像三女神のうち田心姫を沖ノ島、湍津姫を大島、市杵嶋姫を宗像市田島へ遣わしたとされる。「宗像大社」とは、宗像市田島の「辺津宮」、大島の「中津宮」、沖ノ島の「沖津宮」の3つの神社の総称で、この三神社は地理的にほぼ一直線に並ぶ。昭和29年に始まった調査で数多くの国宝級文化財が出土したことから、俗に「海の正倉院」と呼ばれている。古来から漁民の尊崇あつく、「御不言様」と呼ばれ、神社名を口にすることも禁忌とされ、現在に至るまで女人禁制の地。住民はゼロだが、宗像大社から宮司1人が10日間交替で派遣されている。

